日本ロレンス協会ニューズレター　No. 49

2025 年 9 月 25 日

日本ロレンス協会　会長　木下　誠
副会長　岩井　学

真夏のような厳しい暑さはさすがにおさまりつつあり、秋の気配がどこかで感じられる今日このごろ、会員の皆さまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

先の全国大会におきまして、協会の執行部新体制をご承認いただきました。微力ながら本会の発展のために努めてまいります。よろしくお願い申し上げます。本日は執行部を代表して、新体制下第一弾の「ニューズレター」をお届けします。

内容

(1) 次年度（2026 年度）の全国大会について
(2) 今年度（2025 年度）の全国大会報告
(3) 総会（今年度大会）の報告
(4) 第 16 回 D.H.ロレンス国際学会の報告（学会に参加した副会長より）
(5) 第 17 回 D.H.ロレンス国際学会の情報提供（浅井雅志氏より）
（付記：次年度大会に向けて）研究発表者とシンポジウム等企画の募集

(1) 次年度（2026 年度）の全国大会について

今年度の大会の総会にて了承されたとおり（下記ご参照ください）、次年度の大会は、西南学院大学（福岡県福岡市）において、6 月 27 日（土）と 28 日（日）の 2 日間、日本ジェイムズ・ジョイス協会大会と同時開催をいたします。会場校の加藤洋介氏にはお世話になります。よろしくお願い申し上げます。

今年度大会後にジョイス協会事務局と日程等を協議し、1 日目の後半に合同シンポジウムを行います。合同シンポジウムのテーマおよび登壇者については、両協会の事務局を中心に準備を進めています。なお、合同シンポジウム後の夕刻には、両協会合同の懇親会を開催する予定です。

ロレンス協会会員による研究発表は 1 日目の前半に、ロレンス協会独自のシンポジウムもしくはワークショップは 2 日目に予定しています。研究発表にどうぞご応募ください。また、ロレンス協会会員企画のシンポジウムもしくはワークショップのアイデアを募集します。事務局までご提案ください。

なお、今年度大会の総会における承認・決定事項については、下記の「総会（今年度大会）

の報告」をご参照ください。

(2) 今年度（2025 年度）の全国大会報告

2020 年から３年間のコロナ禍によるオンライン開催を経て、2023 年から対面に戻っておりましたが、今年は久しぶりに 2 日間、6 月 21 日（土）と 22 日（日）に國學院大学渋谷キャンパスにおいて、第 56 回全国大会が開催されました。そしてこれまた久しぶり、2006 年の日本イェイツ協会との合同シンポジウム以来の他学会との研究交流として、日本オーウェル協会との合同シンポジウムも企画されました。

大会プログラムは、例年どおりロレンス協会会員による研究発表、菅田泰平氏による「Miriam as Medium: *Sons and Lovers* における色彩の修辞学」と鳥飼真人氏による「『虹』を架ける——ロレンスはどのように形而上学を動かすか」で始まりました。菅田氏の緻密な小説テクストの分析は、学位論文執筆に向けた時期にある若手研究者の発表としてたいへん好感の持てるものであり、今後の活躍が期待されます。そして鳥飼氏は、氏のこれまでのニーチェやドゥルーズを中心とした哲学・思想方面の研究成果を十分に踏まえた発表で、『虹』からさらに他の小説やエッセイ等も含めた大きな仕事の成果として今後まとめられることでしょう。

休憩を挟んでのシンポジウムの１つ目は、日本オーウェル協会のみなさんを迎えた合同企画「オーウェル、ロレンスと政治」が行われました。司会の髙村峰生氏による主旨説明の後、オーウェル協会の近藤直樹氏による「ジョージ・オーウェル『空気を求めて』と D. H. ロレンスの小説——階級問題と共産主義」、大江公樹氏による「D.H.ロレンスとジョージ・オーウェル——政治といふ営みに対する態度」、髙村氏による「トランプ時代にジョージ・オーウェルとジェイソン・スタンリーのファシズム論を併読する」の発表が続きました。それぞれの講師が、両作家の小説における階級問題と共産主義への姿勢の類似と差異、福田恒存と戦後日本の政治文学論争からみる両作家の近さと遠さ、言語哲学者・政治哲学者のジェンソン・スタンリーが展開するトランプ政権の言語統制への厳しい批判と現在の政治状況におけるオーウェルのファシズム論のアクチュアリティ、をめぐって刺激的な議論の土台を提供してくださり、フロアとの質疑応答もたいへん盛り上がりました。

この合同シンポジウムの実施に向けては、ロレンス協会とオーウェル協会の両方の会員で橋渡しをしてくださった福西由実子氏、そしてシンポジウムに登壇くださったオーウェル協会の近藤直樹氏にあらためてお礼を申し上げます。

シンポジウム終了後、プログラムに沿って総会を行いました。その内容は下に報告いたします。総会終了後、会場をキャンパス内のメモリアルレストランに移して懇親会を開催しました。オーウェル協会のみなさんも参加くださり、たいへん楽しい時間となりました。また、今大会にて任期満了となる石原浩澄会長の挨拶の際には、コロナ禍の影響が残る時期の大会開催等、難しい協会運営におけるご尽力に対して、感謝の気持ちを込めた盛大な拍手が送

られました。

翌日、大会シンポジウムの 2 つ目として新進気鋭の 3 講師による「E.M.フォースターとD.H.ロレンス」では、コメンテーターに九州共立大学の田中雅子氏をお迎えし、司会兼講師の加藤彩雪氏を中心に、伝記的にもつながりのあるふたりの作家の想像力と言語表現、セクシュアリティ、モダニズムと思想的展開などをめぐって活発に議論されました。大山美代氏の「フォースターとロレンスの創作上の一致――意識の終末世界に視える女性の表象について」は、異なる物語内容をもつ両作家の短編小説に、正体不明な女性が一瞬だけ登場するという類似した仕掛けの意味について、田島健太郎氏の「E.M.フォースターのゲイ・ナラティブと D.H.ロレンス」は、両者のそれぞれ異なったかたちで潜在化・顕在化するホモエロティシズムからみる影響関係について、加藤氏の「E.M.フォースターとモダニズムの展開における位置――“the old stable ego”の先にあるもの」は、ロレンスの“the old stable ego”をめぐる発言をあらためて取り上げながら、2 つの大戦前から戦後冷戦期にかけてのフォースターの変化とロレンスの影について、3 講師とも緻密なテクスト分析を踏まえての発表となりました。長年にわたってフォースター研究に携わってこられた田中氏の視点からのまとめと有益な質問の後に、フロアとの活発な意見交換がなされました。

なお、以上の研究発表と 2 つのシンポジウムをはじめ、今年度の大会の様子については、協会のホームページの「全国大会」→「第 56 回大会」をご覧ください（現在調整中）。当日の写真入りで報告が掲載されています。

(3) 総会（今年度大会）の報告

全国大会の 1 日目の合同シンポジウム後に総会が行われました。審議および決定事項を報告します。

1. 新体制について

2025 年度からの新体制として、以下のように提案の上、承認されました。

会　長　木下　誠
副会長　岩井　学

編集委員会

編集委員長	福田　圭三
編集委員	大山　美代
	田部井　世志子
	藤原　知予
編集事務	加藤　彩雪

事務局

事務局長（副会長）　岩井　学

会計　　井出　達郎
庶務　　上石田　麗子
広報　　井上　麻未
会計監査
糸多　郁子
中林　正身

2.　2026 年度（第 57 回）大会について

以下のように提案の上、了承されました。

・開催校：西南学院大学（福岡県福岡市）
・日程：6 月中旬から下旬にかけて
（その後の協議により、6 月 27 日（土）28 日（日）の開催となりました。）
・大会形式：日本ジェイムズ・ジョイス協会大会との同時開催、合同シンポジウム企画の可能性を探る。
・オンラインの補助的な活用
会場校との相談の上、あくまでも補助的な活用とする。
・ワークショップ、シンポジウムなどの企画について
日本ジェイムズ・ジョイス協会との合同シンポジウム、日本ロレンス協会独自のシンポジウムもしくはワークショップの企画の可能性を探る。
（ジョイス協会事務局との協議の結果、合同シンポジウムは 1 日目の 27 日（土）の後半に、ロレンス協会独自のシンポジウムもしくはワークショップは2日目（日）に行うこととなりました。）

3.　会計報告

公務により大会を欠席された会計の井出達郎氏に代わり、前会計の鳥飼真人氏より、2024 年度決算報告および 2025 年度予算案の報告・提案があり、会計監査報告の後、承認されました。

その他、報告等：

１．評議員の状況について

評議員の状況について報告しました。定数のようなものはありませんが、現在の数が適切かどうか、地区の評議員を中心に検討していくこととなりました。

２．会員数について

庶務の上石田麗子氏より報告があり、現在の会員数は 83 名です。

３．研究助成について

・大会研究発表のための助成制度

専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない会員に対して、本協会大会で研究発表（シンポジウム講師等の担当を含む）をする際の費用の一部を助成するための制度。（http://dhlsj.jp/dl/josei.pdf）

・和田静雄海外研究発表助成制度

専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない若手会員に対して、海外の学会で D・H・ロレンスに関する研究発表を行う際の費用の一部を助成するための制度。（http://dhlsj.jp/society.html）

(4) 第 16 回 D.H.ロレンス国際学会の報告（学会に参加した副会長より）

去る 8 月 11 日から 15 日まで、メキシコシティにて第 16 回D・H・ロレンス国際学会が開催されました。国立メキシコ自治大学（UNAM）および国立人類学博物館を会場とし、40 以上の研究発表や講演などがおこなわれました。日本からは浅井雅志氏と岩井学が参加しました。活発な議論に刺激を受けつつ旧交を温め、心に残るイベントとなったようです。次回の 2028 年は南仏で開催されることが決まりました。またロレンス没後 100 周年に当たる 2030 年にも国際学会が開催される予定です。候補地としてルーマニア、ドイツなどが挙がっています。日本からも多くの研究者が参加し、盛り上げることができると良いと思います。

(5) 第 17 回 D.H.ロレンス国際学会 The 17th International D. H. Lawrence Conference in Aix-en-Provence, 2-8 July, 2028 の情報提供（浅井雅志氏より）

浅井雅志氏より提供がありました、Chair of CCILC からのメールを添付いたします。

Dear CCILC members,

A majority of you have voted, and all who voted were in favour, so I am very happy to announce that the 17th International D. H. Lawrence Conference will take place in Aix-en-Provence, 2-8 July, 2028!

Also that Adam Parkes was unanimously elected as Chair of CCILC, 2025-2028. Congratulations, Adam! I will now share the CCILC mailing list with him, but he is also cc'd here in case you want to contact him.

The conference directors have been informed and are excited and grateful for this opportunity and look forward to welcoming us. The 17th conference will be announced at the forthcoming 16th conference in Mexico City in August and thereafter by the various Lawrence Societies. In due course

we will share further information through CCILC, such as the CFP, and ask you to share it with your networks so that we can continue to grow our international community of Lawrence scholars. Meanwhile, please hold the dates and let's hope lots of us will meet in Aix-en-Provence!

Meanwhile very best wishes to Adam and everyone who will be in Mexico City next month, for what promises to be a great conference.

I attach an updated list of past CCILC/DHLSNA conferences, with profuse apologies to Ginette for my oversight in omitting details of her 1992 Paris conference from the list of past ILC's I circulated earlier this month. This is only one of 38 conferences that have taken place annually in Paris, in a series launched and until very recently organised by Ginette, who continues to edit *Etudes Lawrenciennes*: now on number 57! Ginette tells me that Gerald Pollinger attended the 1992 conference, and that the organisation was especially complicated by running parallel sessions, something which she has never repeated and is one of many things that makes the Paris conference so special to many of us: not least Ginette herself. Her contribution to Lawrence Studies is surely unparalleled and we all owe her an enormous debt. Thank you, Ginette!

Finally, I would take this opportunity to thank all of you for your support of our Lawrence conferences,
Warm wishes,
Sue

以上、ご報告いたします。
最後になりましたが、今年度の会場校としてお世話になりました上石田麗子氏と学生のみなさんに、この場を借りてお礼申し上げます。すばらしいキャンパスで、すばらしい教室・会場のご準備をいただき、スムーズな大会運営となりました。本当にありがとうございました。

来年は、2013 年の北九州市立大学以来、九州（西南学院大学）開催の全国大会となります。多くの会員の皆様とお会いできることを楽しみにしております。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（付記：次年度大会に向けて）研究発表者とシンポジウム等企画の募集

繰り返しになりますが、次年度大会の個人発表に、どうぞ積極的にご応募ください。また、シンポジウムもしくはワークショップに関しましても、事務局までアイデアをお寄せください。よろしくお願い申し上げます。